

テオおじさんが、病氣になった。

まだ肌寒い春、おじさんは街の病院に入院することになった。

ナーやさんが、病院へおじさんを送っていくらしく、その支度をしにやってきた。

ネコヤナギの固い芽が風になぐられて窓をたたいた。

クロフカが庭の真ん中に坐って、強い西風に吹かれながら家の様子をうかがっていると、モモがやって来た。

そしていつものベンチにひらりと飛び乗ると、溜息をついた。

「おじさん、だいぶ加減が悪いらしいの……」

「そりゃあ、いけないね」

「明日、出かけるらしいわ……」

「長くなるのかなあ……」

「さあ……」

モモの三角の耳も、風にはためいた。

「ねえ、テオおじさんの周り……見た？」

「え？ 周り？……ああ……見たよ」

「影があったでしょ……」

「ああ……ちらほらしてたね……」

動物特有の不思議な力で、人間には見えない何か、彼らには見える

のだった。

「ありやあ、尋常じゃないな……」

「ええ、あたしもそう思う……」

モモは、目を細めてつぶやくように言った。

「あたしに出来ることがあれば……今……だわ……」

モモはすつくと立ち上がり、大きく伸びをした。

「クロフカ……あたし、行くわね……会えて楽しかったわ……元気でね……」

「モモ……君、ほんとうに行っちゃうのかい？」

クロフカは驚いたように頭を挙げた。

「あいつをどうにかするつもりなのかい？ 君一人で太刀打ちできるようなもんじゃないと思うが……」

「これはあたしとテオおじさんのことなの……クロフカ……あなたは番犬としてこの家をしっかり守っていかなくちゃ……マーサおばさんのこと、頼んだわね……」

「モモ……」

モモは、ちよつと震えたように見えた。

が、次の瞬間にはフツツと小さく笑うと、風の中をいつものように少しすまして、庭の塀づたいに出て行った。

それっきり、モモは二度と帰ってこなかった。

その日の午後、ナーヤさんの声が庭で響いた。

「かあさん、大変！　モモが！　モモが！……」

通りで倒れていたモモを近所の人が見つけて知らせ、ナーヤさんが連れ帰ったのだった。

「モモ……！」

モモは、マーサおばさんがひろげたひざ掛け毛布の上に寝かされた。その姿は、外傷は無く、まるで眠っているようだった。が、呼んでももう目を覚ますことはなかった。

「まあ……あんなに用心深い仔が……」

「なんで？……なんで通りになんか出ちゃったの？……」

テオおじさんは、黙ってモモを見つめたままだった。

そして、そっとその大きな手で、目を閉じているモモの頭を撫でた。

「身代わり……になろうとしたのよ……」

マーサおばさんの一言に納得したように

「ああ……」

「あの仔はそういう仔ですよ……あの事故の時の事、ずっと恩に着ていたのよ」

「ああ、そうだな……」

「あなた、必ず……必ず良くなって帰ってきてくださいね……」

言葉に詰まってモモを見つめているテオおじさんの横顔を、クロフカはじっと見上げていた。

翌日、テオおじさんは家を後にした。

クロフカは、門から出て行く車に向かって、いつまでもウオンウオンと呼び続けた。

「おじさん、早く……早く良くなって帰ってきてください……きつと！ きつとですよ……」

つづく

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します